

特集・「アラスカ恐竜展を終えて」

去る7月24日から10月11日までの2か月半にわたって開催された「アラスカ恐竜展」が終了しました。すでに博物館からの報告にもあるように、開催期間中の全入場者数、一日の入館者数など、従来の記録を塗り替えるほどの大盛況のうちに終了したとのこと。これには、展示の準備、期間中の解説・警備、展示の撤収等にかかわった多くのボランティアの方々のご協力によるところも大きく、改めて博物館側からも謝意を寄せられています。

今回はこの展示の企画に関わった3名の方々に寄稿をお願いし、特集を組みました。

アラスカ恐竜研究の成り行き

ボランティアの皆様のお陰で「アラスカの恐竜～アジアをめざした生命～」は大盛況のうちに終了いたしました。この場を持って改めて御礼を申し上げます。入場者数、一日の入館者数、1000人を超えた日数など、数々の記録を塗り替えた展示になりました。これも、皆様のご協力のおかげです。ありがとうございました。

さて、今回ボランティアの皆様には、どのようにしてアラスカ恐竜の調査が行われるようになったのか。その裏話をお教えしたいと思います。



写真はモンゴル東ゴビ砂漠の竜脚類恐竜発掘現場での筆者

さかのぼること17年前、1993年アメリカのワイオミング州から話は始まります。その時私は学部の2年生。当時の指導教官で中生代哺乳類の第一人者であったリグラーベン先生のもとで古生物と地学の基礎を習っていました。そこにカリフォルニア大学バークレー校のポスドクの研究者が訪れてきました。フィオリロ先生です。当時学生だった私ですが、彼との出会いを強烈に覚えています。イタリア系のセクシーな顔立ち、落ち着いた口調で、研究の楽しみを語ってもらいまし

総合博物館准教授 小林快次

た。その時はお互いの存在を知っていたくらいでしたが、その2年後に私はテキサス州ダラスにあるサザンメソジスト大学の大学院へ、フィオリロ先生はダラスの自然史博物館へ就職することになるのです。そこで再会した私たちは、一緒にフィールドをして共同研究をしようとお酒を酌み交わしながら語ったものです。それから10年の月日が流れ、私たちは共同研究のタイミングをずっとはかっていた。私の第二の故郷でもあり裏庭のようなワイオミング州で行うのか。それとも全く違ったところなのか。そして、2007年にその時が訪れました。その年の春にフィオリロ博士から連絡があり「アラスカ州で恐竜化石の出る可能性がある場所を発見した。調査費も政府からと国立公園から保証してもらった。あとは、率先力のある研究者のみだ。ヨシ（私のこと）に是非来てアラスカの恐竜研究を始めたい。」と言われたのです。そして、アラスカの恐竜展の図録にあるように、初年度から大発見があり、調査研究も世界から注目されるものとなりました。

このような出来事は、私の学生にも起こっています。千葉謙太郎君は、カナダの東大と言われるトロント大学の先生と緊密な関係を持っています。また、過去にいた学生たちもそうです。林昭次君は、その道では世界をリードしているドイツの大学でポスドクに、田中康平君は恐竜卵研究の第一人者の元へ、田中嘉寛君はニュージーランドにいる海棲哺乳類化石の大家の元へ、現在湯浅先生の元で博物館学を研究している石田祐也君もデンバー自然史博物館の研究者から慕われています。みんな、人との出会いを大切に、自分たちの将来を切り開いている若者たちです。また、ボランティアの皆さんからは、人格形成において大きな影響を得ており、皆さんの応援が彼らの心の支えに

なっています。彼らを見ていると、これからの古脊椎動物学界がどのように繰り広げられていくのか非常に楽

しみです。

「アラスカの恐竜」展を終えて

無事閉幕した「アラスカの恐竜」展。ボランティアの方々には展示解説だけでなく、展示準備や撤収でも大変お世話になりました。本当にありがとうございました。私は、展示準備から撤収まで、恐竜展の裏側について語らせて頂きます。

今回の展示において、最も大きな特徴であり、壁でもあったのが「恐竜の大きさと建物の大きさ」です。元々理学部として建てられたこの博物館に対して、恐竜の全身骨格は大きすぎると言えます。そしてそのことに、標本の運び込みから苦労することになりました。一番大きなエレベーターに入らない箱が、いくつもあったのです。そのため、クレーンを使って、3階まで上げました。運びこんだ後も、力を要する作業がたくさんありました。恐竜の全身骨格は、いくつかの箱にバラバラになって入っています。それを展示室で組み上げるわけですが、プラモデルのように簡単に、という風にはいきません。何十 kg もある骨と鉄骨を支えながら、いくつかの部分と同時に組み上げる必要があります。展示室の天井の高さに対して、限界とも言えるほどの骨格の高さのため、多くは人の力で行いました(本来は足場を組んで行うそうです)。しかしそんな苦労の甲斐あり、非常に迫力のある展示が出来上がりました。来館者から「どうやって部屋に入れたの?」と聞かれる度に、内心うれしくなっていました。

開幕してからは、展示運営に追われました。展示室で承った、素朴な疑問から専門的な質問まで、たくさんのご質問を受けました。私と千葉謙太郎君の毎朝の日課は、その質問への回答作りでした。すぐには思い浮かばず、論文や本で調べました。その作業を通して、私たち自身も知識を深め、新しい視点に気付かされることもありました。展示解説ボランテ

素敵なカナダ恐竜発掘

私は、理学院自然史科学専攻地球惑星システム科学分野地球環境史グループ小林研究室で、現在修士研究を行っています。今年7月に行った恐竜化石の発掘について紹介します。今回発掘を行ったのは、カナダのアルバータ州の南部で、この地域には植物もあまり生えていない急な斜面が続く、バッドランドと呼ばれる地形が広がっています。このバッドラ

化石ボランティア・北大理学院修士課程 石田祐也

ィアの方も、その質問と回答を熱心に読んでおられ、新たな疑問を持たれた方がたくさんおられました。皆さんに「面白い!」と言って頂けることが、私たちのモチベーションとなっていました。



展示風景

また、来館者やボランティアの方々からのご指摘を受け、展示方法の変更やパネルの追加も行いました。危険性に対してはすぐに注意を呼び掛け、展示方法にご指摘を頂けば、検討の末、変更したのもありました。実際に展示してみなければ分からないことがたくさんあることを実感しました。

最後の大事な『撤収』でも多くの方の、力のみならず知恵もお借りし、誰も大きな怪我をすることなく、恐竜展を終了することが出来ました。一つ忘れ物があったのに後日気づき、宅急便にて送ったことには目をつむりましょう。

最後になりましたが、この度の展示にご協力頂いた全ての方々に、感謝を述べたいと思います。本当にたくさんの方々によって、この展示は支えられていました。次の古生物の企画展がいつになるかは分かりませんが、その際もボランティアの方々はじめ、たくさんの方にお世話になることは確実だと思います。今後ともよろしく願います。ありがとうございました。

化石ボランティア・北大理学院修士課程 千葉 謙太郎

ンドに恐竜時代の地層が露出していますが、今まであまり恐竜化石が見つかっていませんでした。しかし、あえてそこに目を付けたのは、アメリカ・クリーブランド博物館のマイケル・ライアン博士です。私は、彼の発掘プロジェクトに参加させてもらっています。

今回の発掘地は地元の農場の敷地内にあり、その農場主の方のご厚意で倉庫や冷蔵庫付きの小屋

がある場所をキャンプ地として提供してもらっている
ので非常に快適です。発掘の後には冷たいビール



カナダの発掘現場風景

が飲めます！キャンプ地には常に 15～20 人ほどのメンバーがあり、研究者や現在恐竜を研究している学生、授業の一環で集まった学生などで構成されています。みんな気のいい人達でワイワイと楽しみながらキャンプしています。発掘地は複数あり、毎日 4～7 人程度のチームに別れて、3 週間ほど発掘を行いました。僕が発掘していた所は、バラバラになった骨がとにかく沢山埋まっています、骨の下にまた骨、またその下に骨、といった感じで、掘り進めるのも大変です。このように一カ所から大量の骨が見つかる地層をボーンベッドと呼び、ここのボーンベッドからはトリケラトプスの仲間でセントロサウルスと呼ばれる恐竜が子どもから大人まで一緒に見つかっています。ちなみにこのボーンベッドからは、昨年と今年で合わせて 800 個程の骨が発掘されており、さらにまだまだ地層中に続いています。セントロサウルスの仲間は、大人になると顔の後ろに伸びるえり飾りに、それぞれの種類特有のトゲ(アラスカの恐竜展のステイラ

コサウルスの模型にあるトゲトゲみたいなものです)を持つのですが、これだけ沢山の骨化石があるにも関わらず、大人のえり飾りの化石がまだ見つかっていないため、詳しい種類は分かっていません。カナダということで涼しいイメージもあるかと思いますが、今年の札幌のように日中は 30° を越える日も多く、日射しもジリジリと強いため、かなり暑いです。そんな暑い日は発掘場所近くにある洞穴や大岩の日陰で休憩したりしながら発掘を行っていました。今年はこの十年で一番雨の多い年で、一週間以上発掘が行えなかったのが残念だったのですが、そんな雨の多い日には、それまでに発掘された化石のクリーニングを行ったり、標本のカatalog作りをして整理したりします。

恐竜化石を掘るだけでも楽しいフィールドワークなのですが、個人的にすごく楽しみにしているのが、夜の天体観測です。ものすごく田舎なので、街灯も遠くの町灯りもなく、まさに満天の星空。天の川もバッチリ見えますし、しばらく見ていると流れ星もきれいに見えます。去年の発掘の際にはオーロラも見えたりしました。

昼間は気の合う仲間と恐竜化石の発掘し、夜には満天の星空を眺める。さらには、おいしいステーキやハンバーガー、ピザ、ものすごく甘くて大きいケーキが食べられる。そんなカナダが、すでに恋しくなっている今日この頃です。

特別寄稿

松村松年先生小伝

旺盛な研究活動

ドイツ留学から帰国した松村先生の研究活動はその後もとどまることはなく、次々に論文や著作を出版し、自他共に認める世界の昆虫学者となった。この小伝の最初に述べた「世界第一の昆虫学者は…」の自負心は、先生が生涯に発表した昆虫関係の単行本 41 篇、欧文論文 125 編、邦文の論文 97 編、その他一般的な啓蒙書を加えると、自分の背丈に達していたと言う事実裏付けされた言葉であった。

これら出版物の中で特筆すべき著書は、1904 年(明治 37)年に出版が開始され 1930(昭和 5)年までに 14 冊のシリーズになった、日本千虫図解(4 巻)、続日本千虫図解(4 巻)、新日本千虫図解(4 巻)、増訂日本千虫図解(2 巻)ではなかろうか。この精密な彩色図と解説がついた大判の本は、当時まだ昆虫に関心がなかった日本人たちの目を昆虫に向けさせるきっかけ

総合博物館資料部研究員 久万田敏夫

になったことは間違いない。さらにその後 1929(昭和 4)年から 1933(昭和 8)年にかけて出版された日本通俗昆虫図説(全 5 巻)は、その意図を明確に示したものであろう。一部の人たちを除いて、昔から昆虫類は忌まわしい動物で、触るのはもちろん見るのもいやだという人が非常に多いが、これらの出版物はそれが間違った偏見であることを示すのに大いに役立ったことは間違いない。ちなみにこれらの図解や図説に用いられた精密で正確な彩色図の一部は、先生の長兄の竹夫氏によるものであったと自伝に記されている。

松村先生が発表した数多くの論文を見ていると、留学時代に採取した地中海地方のウカ類を除いて、取り扱われているほとんどの昆虫は当時日本領であった樺太や台湾も含む日本産の種類である。しかもある特定のグループではなく、広く全昆虫類にわたっている。これは欧米に比べて解明が遅れている日本の

昆虫相の全貌を、何とか一刻も早く明らかにしたいとの先生の意欲の表われであろう。先生の自伝を読んでいてその辺のことは何も書かれていないが、日本産の昆虫こそが先生の最大の関心事であったようにおもわれるのは筆者だけだろうか。

このことは先生が集められた標本の産地状況からも知ることができる。先生が在職中に収集された昆虫標本は当博物館と農学部で収集されていて、20年以上前に筆者が調べた結果では、このマツムラコレクションには4万点以上の乾燥標本が65科約5,200種に分類整理され、その殆どが当時の日本産であり外国産はきわめて少なかったと記憶している。しかもこのコレクションには約1,500点のタイプ標本を含んでおり、日本ではもっとも重要な昆虫コレクションの一つである。その貴重性を示すエピソードを筆者は学生時代に聞いたことがある。それは、第2次大戦後にGHQ科学担当のアメリカ軍将校が札幌を訪れた際に真っ先に北大に来て、農学部の昆虫標本や植物標本が無事かどうかを確かめていった、という話である。

門下生の養成

1899(明治35)年に教授になっていた松村先生のもとで昆虫学を専攻した学生はあまり多くない。やはり昆虫学では生活の保障が出来ないという風潮が続いていたためであろう。それでもその数少ない門下生たちの殆どは後に高名な昆虫学者に育っていった。

松村先生は学生に研究テーマを与えるさいに、ある種の農作物の害虫の解明とともに、ある特定のグループの分類学的研究を課していたという。旧昆虫学教室に所属されていた標本の中には、分類群毎に整理されている標本のほかに、農作物毎に害虫標本が整理されていた標本筆筈があった。いまではカツオブシムシなどの食害により僅かばかり残っているに過ぎないが、それが学生たちにあたえたテーマの結果である

*ここに掲載します福澄さんの記事は、去る11月5日の第18回談話会でのお話しの要約を、ご本人から投稿いただいたものです。(編集部)

様々な境界領域トカラ ~日本が一番長い村を知っていますか~

私は元もとは化学専攻ですが、縁あってトカラ列島(十島村:トシマムラ)で歴史民俗資料館長を務めていました。トカラは12の島(10ではない!?)からなり、一番南の島から役場本庁(鹿児島市内にあります)まで348.466km(グーグルマップ調べ:東京 兵庫より長い)という、とてつもない広がりをもった島じまです。以前は現在の三島村と一緒に「十島村(ジツトウソン)」と言っていましたが、北緯30度以南がアメリカの統治下に置かれた後に本土復帰をした際、2

と聞いたことがある。先生の初期の著書の大部分は、1897(明治40)年に出版された「害虫駆除全書」をはじめ、1910、1915(明治43、大正4)年出版の「大日本害虫全書、上下」など応用関係が中心であった。日本で昆虫の研究が始まった動機は、農作物の害虫駆除が主目的であったため、松村先生もそれを念頭においていたものと思われる。ちなみに日本の大学では、昆虫学関係の研究室は農学部所属しており、これも害虫駆除の研究を主目的にしていたためである。しかし害虫の研究を進めていくうちに、多くの害虫に名前が付けられていないことを知った松村先生は、分類学研究の重要性を認識して学生たちに分類学的な研究をも薦められたのであろう。以来、北大の昆虫学教室では伝統的に昆虫の分類学を中心にして標本の収集整理がおこなわれるようになった。

松村先生のもとで最初に昆虫学を専攻した学生は、後に台北大学の教授になった素木得一博士で、1906(明治39)年に卒業している。初めバツタ類を研究していたが、のちにハエ類の研究をおこない、昆虫分類学や昆虫学辞典など多くの著書を出版している。1911(明治44)年卒業の小熊樺博士は後に北大理学部の教授として染色体の研究に転向するが、最初はトンボ類の分類学的研究をおこなっていた。また松村先生の跡を継いだ内田登一博士(1924(大正13)年卒業)はヒメバチ科を中心にハチ類を、河野広道博士(1927(昭和2)年卒業)はゾウムシ科を中心に甲虫類を、さらに1931(昭和6)年に卒業して3代目の昆虫学教室教授になった渡辺千尚博士は、コマユバチ科のハチ類を主体に分類学的な研究をおこなってきた。今農学部から博物館に移管された昆虫標本はこのような研究を目的に収集されたものであり、これらの研究の結果として多くの新種のタイプ標本が含まれることになった。 つづく

4D シアターボランティア 福澄孝博

つに分かれました。十島村には大きな3つの特徴があります。1)南北162kmと日本で一番長い2)役場本庁が行政区域内に無い(他は竹富町と三島村:両者は十島からすれば本庁がホンの隣町にあるようなもの)3)アメリカの統治下に置かれた地域の中で唯一独自の振興法が無い。記録に登場する一番古いトカラは、日本書記の654年の項、「吐火羅国の男二人・女二人、舎衛の女一人、風にあひて流され、日向に流れ着く」というもの。しかし歴史はもっと古く、縄

文前期の遺跡も発掘されています。

かつては黒潮に乗ってやってくるカツオを獲って鯨節として出すのが主な産業でしたが、現在は子牛を出荷する畜産・フルーツ関係の農業など第一次産業と、第三次産業(人口減少により観光業などが相対的に高くなった)が主となっています。中之島の主峰御岳(オタケ)は 979mあり、島の高さでは全国 8 位です(別名トカラ富士)。列島は大まかに言って、二列の平行な南北の連なりを持ちますが、西側の旧期火山列は 1000 万年以上前の古い火山で、浸食も始まっているのに対し、東側の活山列は活動開始から 100 万年前後の活発な活火山です。

タイトルにもあるようにトカラは丁度、さまざまな立場での境界域になっており、センサーゾーンとして重要な働きをしています。生物分布的には渡瀬線が存在や植物分布に見るように「亜熱帯と温帯の境界」となっていますし、民俗文化的にも南方文化と大和の文化の交流点となっています。この、風習・道具の係わり方は 1)北から伝わったもの 2)南から伝わっ

たもの(あるものには伝播に連れての進化も含む)3)南北両方から来ているもの・両方の性質を包括するもの4)特定の地域とのみ共通性を示すもの、といった分類が出来ます。私のもう一つの顔、天文学の立場で言えば、太陽から一番近い恒星が見える北限であったり、「すばる・すまゐ」の呼称(プレアデス星団のこと)の南限であったりと興味深いです。逆に、トカラの南北で共通な星の和名も見つかっています。

トカラの魅力はとてこの原稿だけでは伝え切れません。再び総博でお話する機会を設けて戴く(笑)か、拙著「日本一長い村トカラ」(梓書院:共著)をお手にとってご覧下さい。今でも4Dメンバーとしてチョコク北大に顔を出しておりますので、見かけられたら気軽にお声をお掛け下さいませ。

(前、「国立十島村歴史民俗資料館長(TOKARA 中之島天文台長)兼務。現在、「兵庫県加古川市立少年自然の家」勤務)

活動報告・他

遠友夜学校のある生活

平成遠友夜学校教頭・北海道大学理学院修士課程 竹内ひかる

新渡戸稲造が貧しい子弟のための学び舎として設立し、その後学生ボランティアに支えられて 50 年も続いた「札幌遠友夜学校」。その精神を引き継ぎ、藤田校長と学生有志で創設した現代の学び舎が「平成遠友夜学校」です。私は北海道大学の雄大なキャンパスや Boys, be ambitious をはじめとする校風に惹かれて受験しました。せっかくの総合大学なんだからいろいろな分野の人の話を聞いてみたかったのと、この夜学校の主旨がすごく北大っぽいなと思ったので、ボランティアをやらせていただくことにしました。

学生スタッフの主な仕事は当日の司会進行と毎週の講師探しです。

司会の際は最初に講師を依頼することになったいきさつや、講義内容に関係のある時事の話をするなど、生徒さん達が講義を聞く姿勢に入りやすいよう心がけています。講義後の質疑応答では、内容が難しくて挙手が少ない場合には自分が率先して質問したり、ときには補足説明をさせてもらったりと、講師の方と生徒さんのコミュニケーションが上手いくよう橋渡しをします。挙手が多い場合は時間の都合で全員の質問を取り上げることができないこともあるので、どこで切れば良いのかは毎回悩みますが、勇気を出して堂々と言うようにしています。生徒さんの顔

に疲れが見えたら早めに切り上げるようにするなど、会場全体の雰囲気を感じ取ることも大切です。司会以上に大変な仕事は毎週の講師探しです。依頼する対象は主に北大の教員や学生で、ジャンルは多岐に渡っています。どんな面白い研究をしている人がいるのか、旬な話題は何か、新聞やテレビニュースなどでの情報収集は欠かせません。スタッフの知り合いの先生や学生に講師をお願いするだけでなく、まったく初対面の方に依頼することもあります。その場合は遠友夜学校の存在を知ってもらい、主旨を理解していただくところから始めなければなりません。有名企業の役員の自宅に突然依頼の電話をかけたこともあり、用件を手短に分かりやすく伝えるにはどうしたら良いのか、とてもいい勉強になりました。

講師の方とはどうしてもメールでのやりとりが多くなるので、言い回しに失礼がないよう十分に確認しながらメールを作成しているつもりです。連絡のマナーなど、自分で調べて行動したことは今でもしっかりと覚えており、社会に出る前にそのような知識を得、経験できたことも、私が遠友夜学校に感謝している点です。おかげさまで、度胸もついたように思います。人と接する楽しさを教えてもらいました。

また、一般の人に専門分野を説明するのは難しいことですが、自分で講師を務めて、どう話せば興味を持ってもらえるか、どれだけ噛み砕いて説明できるか、講義の準備を進める上で自問自答を繰り返していくうちに研究の意義や流れを再認識できたのでよかったです。

聞き手としては、毎週異なる分野の講演なので純粹に知識が増えますし、同じ分野の発表でも講師が違えば新たな発見があります。

大学教員の講演は大学の知を市民のみなさまへ発信する素晴らしい機会であり、学生講師の場合はそれだけではなく、人前に立って話す絶好の練習場にもなります。様々なバックグラウンドをもち、温かい目で見守ってくださる生徒さんからの質問や意見は、直球から変化球まで幅広く、自分の研究活動を多方面から見つめ直す良い機会です。夜学校が北大を代表する研究者が育つ手助けになり、発表者 聞き手双方の学びの場となることを願っています。

植物標本庫の実態について

現在、植物標本庫はコケ類・シダ類・裸子、離弁花類、合弁花類、単子葉類の4部屋に分け、新エングラー方式の分類体系に基づき収蔵されています。

各部室には標本箱があり科名別、さらに属名のアルファベット順に配架されていますが、どの部屋も収蔵スペースが窮屈であり、一部の標本箱内の棚では無理に押し込まなければならないような状態が生じています。

このような標本の出し入れが困難な棚では、標本閲覧のたびに乾燥標本が一部損傷する恐れがあるかと心配します。もしも標本に損傷することがあれば、北方系植物標本を多数収蔵している北大総合博物館植物標本庫としては大きな損失になるかと思われれます。

いま、植物ボランティアは3グループが週3日(夏期2日)、植物標本の制作・配架をしていますので、年間では5,000～6,000点の新しい標本が配架されると予想されます。

『モノづくり』の愉しみ

学術的に貴重な化石を展示したり研究したりする場合には、毀損などの恐れがあるため本物の化石をそのまま使うことはできません。そこで、本物を忠実に再現した“レプリカ”が必要になるのです。私た

スタッフを始めて3年目になりますが、生徒さん達はとても勉強熱心で、そんな姿をみるといつも嬉しくなります。ボランティアをやっていて良かったと思う瞬間です。

最後になりましたが、平成遠友夜学校を語る上で欠かせないのが一般市民ボランティアさん達の存在です。夜学校の講義が始まるのは18時半ですが、その1時間以上前に来て会場設営をしてくださっています。学生スタッフが気づかないところにまでいつも気を配っていただいております。学ばせてもらうことも多いです。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

平成遠友夜学校は敷居が高そうで入りづらいというお話を聞くことがありますが、そんなことは決してありません。どうぞお気軽に、一度足を運んでみてください。日常生活の良い刺激になること間違いなしです。

植物ボランティア 松井 洋

さらには、各植物標本庫には未整理の標本が入ったダンボール箱が積まれています。いずれこれらは植物ボランティアの作業によって制作・配架が進めば、4標本庫では収まりきらないこととなります。

つい先頃、N314に植物標本用の部屋が確保されました。これに依って各植物標本庫内のダンボール箱類などが搬入することができ、目下配架をスムーズにするための作業を精力的に進めています。

また些細なことですが、一部に老朽化した標本箱があり、配架のさいに手や額に擦り傷をしています。本人の不注意でしかないのですが、老朽化した標本箱の更新を検討していただければありがたいことです。

国民の財産である植物標本が、多くの研究者に閲覧・利用されるためにも、現在より余裕のとれる標本庫にするためには、少なくともあと数部屋が必要になっていくのではないかと、懸念しています。

化石ボランティア 鈴木 順子

ち化石ボランティア・レプリカ製作班のメンバーは、本物に近いレプリカを作れる技術を身につけて展示や研究・教育に役立ててもらおうと練習を重ねています。

作業手順を簡単に説明しますと、まずシリコンで本物の化石の型をとって母型を作ります。水で溶いた石膏を母型に流し込んで固まったらアクリル絵の具で着色し、保護のためニスを塗って完成です。最近はいよいよ作業に慣れてきて『ものづくり』を楽しんでいます。さらに良い物を作ろうと意見を出し合ったり、外部へ講習を受けに行ったりと向上心に燃えてもいます。今はまだ練習段階のためデスマスチルの歯のような小さい物しか作れないけれど、習熟してきたら頭骨のような大物にも挑戦してみたい。

...と書くといかにも化石マニアのようですが、実は私は古生物の事はあまり知らず、『自分の作った物が他人の役に立てば嬉しい』という単純な動機から参加しています。

ですから化石や恐竜に詳しくなくても大丈夫！『レプリカを作りたい』という方、私たちと一緒に活動してみませんか？主な活動日は火曜と金曜ですが、作り方を覚えてしまえばご自分の都合のいい曜日に活動することができます。博物館3階のS304号室を一度のぞいてみてください。

博物館にある故軍医(医学部20期生)の鉄兜

博物館に銃弾が貫通した鉄兜が所蔵庫に眠っている。この遺品について少し調べた。

「北大医学部20期生・軍医大尉岡村夏樹追悼集」が有ることが判った。北大図書館・医学部図書館など



銃弾が貫通した鉄兜

兄戦死当時の状況報告

兄の軍医任官後より、戦死までの経過を茲にまとめると、兄は北大卒業後、短期現役軍医として昭和19年12月陸軍軍医学校卒業、軍医中尉に任官、相模原の東京第三陸軍病院付となり勤務していたが、昭和20年2月、第88師団125連隊第1大隊付に転補され、2月18日上野より出発し、仙台を経て2月20日札幌の新潟奈へ立ち寄った後、稚内より樺太に渡った。



北大医学部時代の岡村夏樹氏

125連隊は樺太の国境および北半部の防備を担当

図書ボランティア 沼田勇美

で調査したが見当たらない。執拗に追悼集を探すと、大阪府立図書館に所蔵されていることが解り、本を借り出した。以下は追悼集(ご令弟・芳樹氏・昭和52年8月16日発行)から引用した。

死亡告知書(公報)

本籍 新潟県南魚沼郡石打村大字上一日市 269

歩兵第125連隊 陸軍軍医大尉 岡村夏樹

右は昭和20年8月16日時刻不明、樺太古屯で戦死(頭部貫通銃創)せられましたのでお知らせします。

昭和22年4月26日

新潟地方世話部長 田中武夫

し、兄着任当時、第1大隊は昭和20年3月頃までは、上敷香南方の内路で対米戦に備えて陣地構築中で、4月以降は上敷香西方5キロの泉部落にて陣地作業を行っていたが、8月7日消印の兄からの最後の手紙も至ってのんびりしたものであった。

しかし20年8月6日頃より国境方面のソ連軍の動きが活発となり、8月9日、日ソ開戦通報と共に125連隊は急ぎょ北上し、国境付近に展開した。

以後、兄は第1大隊本部と終始行動を共にし、8月10日未明より第1大隊は、右第1戦として半田-古屯間の中央軍道上、師走陣地の配備につきソ連軍の攻勢を阻止していたが、ツンドラ地帯から迂回したソ連軍の一部が古屯に迫ったため、第1大隊主力で古屯守備を行う事となり大隊長小林貞治少佐の指揮下、実勢力1個中隊弱(約150名、連隊砲1門、迫撃砲1門)で、8月14日午後、古屯に進出し、8月15日、16日の両日、ソ連軍約2個連隊(5千名、戦車50両、大砲数十門、飛行機100機)と死闘を演じ、8月16日午後2時30分頃、小林大隊長、岩貝副官共に戦死した。兄は、指揮官壕の後方の壕中で負傷者の手当てを行っていたが大隊長の救出に壕を出た所を敵戦車砲に打たれた。...と伝えられている。

本学出身の若い軍医の遺品の鉄兜が博物館に所蔵されている。戦争を知る世代の一人として見るに忍び

ない。

「大本営」と「行在所」門標 第3報

図書ボランティア 沼田勇美

北大農学部前の聖蹟碑

本ニュース12号に久末さんが表題の看板を紹介した。今から70年以上も昔に、北海道を舞台にした陸軍大演習に使われた看板です。続いてニュース17号に、筆者が島松陸上自衛隊演習場の「聖蹟碑」を紹介した。ここでは、農学部へ向かう右側に当時建立された「聖蹟」と刻した石碑との関連性について報告します。

北大農学部前の石碑であるが、この碑に案内看板

がないので何の記念碑か判らない。ロータリーを挟んで真向かいのクラーク博士胸像前は、いつも記念写真を撮る観光客で賑わっているのと対照的だ。この碑には、「聖蹟」と碑題がついている。インターネット検索をすると、昭和12年3月31日設置と云う。

碑文は、石材の材質が悪いのか彫が浅くて、何文字かが判読できない。辛うじて、下記の様に読めた。

閑院宮載仁親王殿下篆額
 昭和十一年秋
 本道二幸セラレ武
 技シ方ヲ省シ給ウニ
 本学農学部ヲ
 大本営及行在所と究メ
 ノセ給ヒ十月一日ヨリ
 日間駐御アラセラレ
 二十月八日畏クモ本学
 二行幸仰出サレ中央
 講堂ニ於テ諸員ニ謁ヲ
 給ヒ尋イテ農医工理各
 学部ニ臨マセテ親シク
 学術研究業績ヲ覽ハ
 是ラル是レ洵ニ本学空
 前ノ盛事ナリトス乃テ
 之ヲ貞一勤シテ此ハ
 光栄ヲ永久ニ記念ス
 昭和十二年三月
 北海道帝国大学総長
 高岡熊雄謹

印は判読不能な文字



「聖蹟」の文字は、ヒゲの宮様として人気のあった閑院宮載仁親王の揮毫。碑文は当代の名筆家といわれた比田井天来の筆。昭和11年10月、北海道で陸軍特別大演習が行われた際、新築直後の農学部本館が天皇陛下の行在所(仮御所)と、大本営(戦時、天皇に直属して置かれる最高の統帥部)となったことを記念するため設置された。

編集部から

ボランティア・ニュース19号をお届けいたします。今回も、沢山の投稿をいただき、8ページ仕立てとなりました。入場者数などで従来の記録を大幅に塗り替えるほどの大盛況裏に終了した「アラスカ恐竜展」の裏話を特集しました。なお、これには、ボランティアの方々のサポートも大きく寄与しているところです。

* 来る12月10日(金)は、第19回談話会(北大名誉教授 宮本衛市氏の「情報社会を考える」)と引き続き忘年会を行います。多くの方の参加をお待ちしています。

* ニュース原稿の寄稿、また談話会、見学会などの企画に際して、皆様のご意見、アイデアお待ちしております。

* ボランティア・ニュースは博物館のホームページからもご覧になれます。

<http://www.museum.hokudai.ac>

ボランティア・ニュース

編集・発行
 北海道大学総合博物館ボランティアの会
 (担当者:星野、永山、沼田、安田)
 発行日:2010年12月1日
 連絡先
 〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
 Tel: 011-706-4706